

# Olive News

オリーブ 便り

基本理念 患者さんの権利を尊重し、良質・安全な医療を提供するとともに、医学の教育・研究を推進し、医療の発展に寄与します。



## 「国立がん研究センター認定がん相談支援センター」認定取得について

香川大学医学部附属病院 がん相談支援センター

令和4年1月1日付けで、「国立がん研究センター認定がん相談支援センター」として認定を受けました。全国では29施設、四国では四国がんセンターに続き2番目になります。

がん相談支援センターは、「がん」に関するさまざまな悩みや不安の相談、知りたい情報などについて気軽に相談できる窓口です。今後も、がん患者さんやご家族が、その人らしい生活や治療選択ができるように、相談支援に努めてまいります。



## 令和3年 春・秋の叙勲受章について

香川大学医学部 総務課職員係

令和3年春の叙勲(4月29日付)において、元診療放射線技師長の加藤耕二氏が保健衛生功労者として瑞宝双光章を、令和3年秋の叙勲(11月3日付)において、元看護部長の細川克美氏が保健衛生功労者として瑞宝単光章を受

章されました。

香川大学にて伝達式をそれぞれ令和3年12月21日、12月24日に実施し、病院長から勲記及び勲章が渡されました。



右から3人目が加藤耕二氏



右から2人目が細川克美氏

## 毎日がワンダーランドの23年間

香川大学医学部附属病院 呼吸器外科 診療科長 横見瀬 裕保

平成11年4月に日本赤十字社和歌山医療センターから赴任して23年となり、本年3月で定年退職となります。長い間、本当にお世話になりました。当時は香川医科大学第二外科で呼吸器外科、乳腺内分泌外科、消化器外科を担当していました。当時の田中学長から消化器外科を一本化したいという命を頂き、翌年からは現在の呼吸器外科、乳腺内分泌外科に専念してきました。以後、呼吸器外科、乳腺内分泌外科症例を増やすことに専念しました。私の専門である肺癌の手術症例は赴任前平均37例から158例に増やすことが出来ました。香川県ではナンバー1です。進行肺癌に対する化学放射線療法・手術は全国でも注目されています。胸腔鏡手術、ロボット支援手術にも早期から取り組み、患者さんにやさしい医療を展開しています。

平成26年から6年間、病院長として病院再開発、経営の立て直しを行って来ました。当時は7年連続稼働率低下、手術症例数低下の状態の中、病院の再開発が行われていました。国から完全な建て替えが認められませんでしたので非常に効率が悪い居ながら改修を強いられました。5年間、最大80床減の状態でご前年度か

ら5億円増収という無茶苦茶な計画が私を待っていました。常にどこかで壁を破壊しており、患者さんからは苦情の山です。当時、県立中央病院、屋島総合病院はプランニュー病院ですから患者さんの大きな流れを変えるのは非常に困難でした。出来ることは限られていましたが、出来ることはすべて動員しました。皆が現状を理解して誇りをもって頑張ってくれた結果、最低となった稼働率76%(平成27年度)が85%(平成30年度)まで改善しました。手術数は開院以来、初めて6,000例を超えました。分娩数は開院以来、初めて700例を超えました。

毎日がわくわくのワンダーランドで楽しかったです。23年間本当にありがとうございました。皆に会えて幸せでした。



## 退職に際して

香川大学医学部 事務部長 中島 一浩

昭和58年早春のある晴れた日、私は面接のため琴電高田駅で降りました。愛媛から来た私は土地勘が無く、地図を頼りに黙々と川沿いを歩きました。大学らしき建物は見えず、徐々に寂しくなっていく風景に大変心細く感じたのを覚えています。その4月、香川医科大学の事務職員として採用され、大学職員としての人生がスタートしました。(当時は、国家公務員)10月に附属病院が開院する年でした。これから始まる生活に、夢と希望で一杯でした。定年退職なんて、頭の片隅にも無かったです。

最初は学生課に配属され、学生さんと共に仕事がありました。当時は医学科のみで、まだ4年生が最上級生の学年進行中ででした。私よりも年上の学生さんも多く、対応に少し戸惑いました。当時の学生さんが、今では学部や病院で中心となって活躍しています。一緒に働けて、本当にうれしく思います。あの頃、学生課で話していたことの一つが現実となりました。

やがて、香川大学となり(平成15年10月)、公務員から法人職員(平成16年4月)となりました。大学の統合、法人化では、旧香川大学の多くの方と協力して準備をしましたが、特に病院については医科大学が中心となり進めました。その時の文部科学省での概算要求ヒアリングは、大学に対して厳しく、その後働くうえで貴重な経験となりました。

平成17年からは、家族の理解のもと、単身、香川大学を飛び出し武者修行へ旅立ちました。高知、島根、香川の各大学では課長として、信州、東京医科歯科の各大学で附属病院の部長として病院運営に関わってきました。各大学では病院長をはじめ副病院長や

メディカルスタッフ、そして事務職員にお世話になりました。全国に知り合いができました。それぞれの地域で病院の役割は違いますが、大学病院であることは一緒であり、目指すものは同じです。ただ、やり方が千差万別です。方法なんて幾通りもあるという事です。

ラスト3年間、香川に帰り、香川大学の皆さんと仕事ができ、心から感謝しています。私の経験を活かしたかはわかりませんが、全力でぶつかりました。事務職員の皆さん、病院はとてもやりがいのある仕事でしたよ。ここで、バトンを渡します。これからも地域から愛され、信頼され続ける病院を全職員が一丸となって目指してください。お世話になりました。本当にありがとうございました。





## 感謝をこめて

香川大学医学部附属病院 看護部 看護部長 富山 清江

昭和58年10月香川医科大学医学部附属病院開院以来、39年間勤務させていただき、令和4年3月末で定年退職を迎えることとなりました。当時、西病棟(331床)の開院に向け、日々準備に専念し、同年10月20日開院を迎え、初めて入院患者1名を受け入れることに、右往左往しながら勤務に就いたことを鮮明に覚えています。時を経て、電子カルテ2000年問題への対応、平成22年7対1看護師配置導入、そして平成26年6月28日南病棟移転以降、平成30年末まで改修を繰り返しリニューアルオープンしたことも昨日のこのように感じています。看護部組織においても、その間大きく変化してまいりました。看護単位の新設、新看護提供体制、教育体制の再構築、医師のタスクシフトに至るまで、これまでを振り返ると多くのことが心に残っています。

看護部は、患者さん中心の看護、高度先進医療の中で温かみのあるヒューマンケアの実践に努力を重ねています。看護部長として



3年間、皆様の多くのご指導とご支援により、医療環境が厳しく変化する時代にあっても、なお一層期待に応えられるよう新たな価値の創造に努めてまいりました。今後とも、看護部組織の発展のため、ご理解とご支援をお願い申し上げます。これからの香川大学医学部附属病院のますますのご発展と皆様のご健勝を祈念し退任の挨拶とさせていただきます。最後になりますが、病院スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

## 人の縁に感謝

香川大学医学部附属病院 看護部 看護師長 森 初音

昭和60年4月、東病棟がオープンのに看護師100人余りの採用者の一人としてスタートを切りました。はや37年が過ぎ今年度で退職を迎えます。長きにわたりご指導くださった皆様に感謝申し上げます。

「目の前の患者さんをあなたのご両親、愛する人と思って対応ください」

看護師長1年目、教授回診の時に当時の石田俊彦元病院長が医学生に言われた言葉に、感銘を覚えました。それより「人を大切に」という言葉を大事にして実践してきました。実習で患者さんに向き合い悩んでいた看護学生さん、私たち看護師と夜中まで患者さんのために時間を一緒に過ごした研修医の先生、多方面から医療の質向上にと支えて下さった他職種の皆様との出会いは私の財産で

す。今ではこの人たちが病院を支え牽引していく頼もしい存在で、それぞれの立場で頑張られている姿を見ると、人と人との出会いは、このように縁を紡いでいくのだと実感できます。患者さんに良質な医療を提供する大学病院すべての職員が、この病院で働いて良かったと思える病院組織であることを願います。まだまだコロナ禍の厳しい状況ではありますが、皆様のご健勝を心より祈念し退職のご挨拶とさせていただきます。



## 定年を迎えて感謝の挨拶

香川大学医学部附属病院 看護部 看護師長 森田 伸子



昭和58年病院開設を機に10月から香川に戻り39年間お世話になり、令和4年3月末で定年を迎えることになりました。開院時のことを思い返せば、開院当日の勤務でその時は、小児科・産婦人科病棟に配属され小豆島から生後数日の赤ちゃんの搬送がありました。戸惑い、不安な思いをしながら主治医と先輩看護師の指導により対応したことが懐かしく鮮明に思い出されます。

その中でも、平成15年4月地域の医療機関と大学病院との連携

窓口として地域連携室が開設し「患者医療相談窓口」としてスタートしたのちに、私は平成17年～22年まで退院支援で看護の役割を明確にするという目的で携わりました。現在は連携を推進し業務を拡充し地域医療機関からの患者紹介に関わる前方支援と、治療後の退院調整や在宅支援に関わる後方支援で、総合地域医療連携センターと名称も変わり機能拡大した部門で勤務を終えることになりました。看護を多面的にみていくには、院内、院外において多職種と連携し協働しながら、お互いの専門性を認めることの必要性を感じ、さまざまな年齢層の方たちと出会い、そしてつながり、その経験を持つ方の多様な価値観に触れることで多くの学びをいただきました。

これまでたくさんの方に支えられて、この日が迎えられることを心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、皆様のますますの発展とご健勝を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

## 第37回全国国公立大学病院集中治療部協議会主催報告

香川大学医学部附属病院 集中治療部 副部長 浅賀 健彦

全国国公立大学病院集中治療部協議会は病院長会議の下部組織で、決議内容を上申する目的で発足いたしました。現在は独立して運営されております。このたび第37回全国国公立大学病院集中治療部協議会を香川大学が当番校として開催いたしました。昨年に引き続きコロナ禍での開催であった為、リモート開催となりました。開催方法をどうするかで昨年末まで悩みましたが、結果的にはリモート開催で正解だったようです。高松を楽しみにして下さっていた方々も多かったので、現地開催を模索しましたが状況が状況ですので致し方ありません。

協議会ではまず文部科学省医学教育課大学病院支援室 竹本 浩伸室長補佐から「大学病院を取り巻く諸課題について」と題して講演いただきました。その中でも「医師の働き方改革」は身近な課題でした。やはり考えを変えなければいけない状況であることを痛感いたしました。ただ、文部科学省としてできることを現場からあげて欲しいとのお答えもいただきましたので、今後考えていきたいと思っております。

次に、パネルディスカッションとして「国公立大学病院における集中治療科開設を考える」と題して3大学の先生にご講演いただきました。これは、昨年10月に日本集中治療医学会西田修理事長から医療施設調査および医師届出票における集中治療科の追加についての要望書が厚生労働大臣宛に提出されたことを受けて企画いたしました。大学病院の集中治療部は、麻酔科や救急科の一部として診療されている施設がほとんどです。しかし、札幌医科大学、自治医科大学、東京医科歯科大学では集中治療科が独立して診療および学部教育を行っています。それぞれの大学病院集中治療部の歴史や今後の展望等についてのお話は非常に興味深いものでした。これから新たに独立して集中治療科を開設しようとしている施設にとって、参考になったのではと思っています。

イレギュラーな開催方式ではありましたが、門脇病院長をはじめ、本学関係者のご協力のお陰で、滞りなく運営できましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。



## 第37回全国国公立大学病院集中治療部協議会看護師長会主催報告

香川大学医学部附属病院 集中治療部 看護師長 山本 亜由美

令和4年1月21日に第37回全国国公立大学病院集中治療部協議会看護師長会を開催いたしました。この会は、集中治療部の管理運営、集中ケアに関わる問題を協議し、相互の理解を深め、看護の質向上を図ることを目的としています。本来ならば対面で行う予定でしたが、COVID-19の影響により直前でWEB開催へと変更となり53病院の参加がありました。会議では、3つの病院に「チームで活動を行い、看護の質の可視化」「面会制限のある中、テレビ電話やICUダイアリーを活用し、患者・家族に寄り添った看護実践」「COVID-19受け入れ経験に関する取り組みや課題」をテーマに発表していただき、情報を共有しました。患者さんやご家族には、COVID-19により面会制限や面会禁止など、精神的な負担となっていること、そのために看護師になにができるのか、意見を出し合いました。また、患者さんへ感染させないために、生活にも細心の注意を払っている看護師のメンタルヘルス、そのような状況の中でどのように看護師の教育を行い、看護の質を向上させるのかについても意見を出し、有意義な看護師長会となりました。

そして、会議開催にあたり、ご支援下さいました総務課の皆様へ深く感謝申し上げます。

ケーブルTVで放送中

**イキイキさめき健康塾**  
香川大学医学部附属病院 医療セミナー

詳しくはこちら



3月のテーマ 「にきびQ&A『にきびは病気ですか?』」

4月のテーマ 「『急増しているパーキンソン病』運動のススメ」

※令和4年度より年4回の発行に変わります。次回は令和4年6月号となります。

編集委員会(50音順)

(2022年2月現在)

阿部(看護)、岡内(外来)、金西(副病院長)、亀田(病棟)、木内(検査)、小坂(薬剤)、圖子(管理)、筒井(経営企画)、仁尾(医療支援)、門田(放射線)、横井(医療情報)、横川(総務)、和氣(医事)〔委員長 門脇病院長〕